

◀ 書 評 ▶

清原 迪夫 著

「いたみの臨床」

東大教授（生理学）内 蘭 耕 二

感覚生理学の中でも痛みに関する研究が、一番おけているようである。本書の著者清原博士もいっておられるように、痛みの研究は感覚の中でも特殊なもので、その研究法も完成されたとはいいい難い。光や音に関する知覚は昔からよく研究され、その内容も著しく豊富である。痛みの研究は上記の感覚と異なって、客観的な取扱いが困難である。いきおい動物実験が必ずしも容易でない。痛みの受容器、その伝導路、中枢神経などいずれの研究面をとりあげてみても、はなはだ漠然としている。

一方、医学における痛みの比重はきわめて大きいといわなくてはならない。医師の門をたたく患者の大部分は、多かれ少なかれ身体のいずれかの部分における痛みを訴えているわけである。

本書は神経・筋の生理学的研究10年のキャリアを持つ清原博士が、豊

富な基礎研究を臨床面に応用してえられた知識の集大成されたものである。最近における基礎的研究の成果を十分にとり入れて、これを臨床の実際面に応用しようとする同博士の意欲がありありとうかがえる。

このような好著がここに世におくられたことを多くの読者とともに喜びたい。

痛みの感覚としての特殊性、その受容器の構造と機能からときおこし、広く臨床応用の実際について筆をすすめ、実地医家の日常活動にも役立ちうようにとの配慮がうかがえる。

著者は本書のために長い時間をかけて欧米のこの方面の専門家たちとも、じかに膝をまじえて意見の交換をしてこられたと伝え聞いている。痛みの研究は従来の方法に何か新しい方面を加え用いるのでなくては発展の望みがない。生理学的な方法の

ほかに、生化学的な、もしくは薬理学的な方法が有機的に組織的に用いられなくてはならない。著者は早くからこのことを意識し、痛みのメカニズムの解明に心をくだし、末梢、中枢における神経伝導路を心にえがきつつ痛みの対策を樹立しようと、真剣に取り組んでおられるように見える。

総頁数 350、その前半が基礎編、後半が臨床編と見られよう。本書には痛みに関するすべての知識がもられているといっても過言ではなからう。豊富な文献が巻末に添付されているのは、この方面の研究者にとっては座右好個の参考資料である。

B 5 判, 344 頁, 図 139

写真10, ¥ 3,200 ㊦ 120

医学書院 刊